

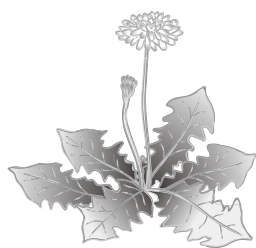


季節を知ったら 暮らしが楽しくなった

〈第五十四号〉

啓蟄

三月五日



千束屋

ご存知、弥次喜多道中の『東海道中膝栗毛』で、伊勢参りの二人が古市で上がった妓楼が千束屋。遊女たちが伊勢音頭を踊る五十畳敷きの「鼓の間」が目当てでした。その千束屋の膨大な資料を展示する「伊勢の歌舞伎と千束屋」展が皇學館大学の神道博物館で始まっています。

千束屋は宝暦七年（一七五七）に尾張の清洲から伊勢に移り、妓楼を開業。やがて身内に不幸が重なると、貸衣装業に転業します。展示された貸衣装の数々は、金糸で刺繍が施された色鮮やかな打掛から、狂言や歌舞伎用の衣装やかつら、小道具など。赤穂義士と記された羽織もあります。これらの貸出先は、伊勢志摩地方を中心とした八十ヶ所にのぼります。先日訪れた答志島の八幡祭でも地元の人による芝居が上演されましたが、分布図を見ると答志も貸出先になっていました。明治時代以降は地芝居への貸出を主としており、貸衣装業が成り立つほど、地芝居が盛んだったことがわかります。

会場できりりとした表情の女性の写真に目が止まりました。六代目山田長好氏の妻、山田さいさんです。現在の当主の母親にあたります。自筆の座右の銘も展示されています。

- 一、誠を取り外すな
- 二、陰気を去れ陽気になれ
- 三、我を離れ天にまかせよ

素人芝居の衰退とともに千束屋はさいさんの没した昭和五十四年（一九七九）に廃業。座右の銘からは、さいさんのゆるぎない信念が伝わってきます。古市の長い長い歴史がここにもありました。

※特別展は五月三十日まで（前期展示は三月十日）

文 千種清美